

# 自然災害が綴られた文学作品は 貴重な教訓を伝える

**自** 然災害が頻発する日本で、過去に起きた災害をどう後世へと伝えていくかは重要な課題である。近代科学が発達している現在、国や地方自治体など公的な機関だけでなく、土木、建築、地震といった分野ごとに組織されている学術団体、研究機関が行う調査が貴重な知見を得るのに欠かせないことは言うまでもない。だが、そうした成果が構造物の基準や制度に反映されていくにしても、国民が日常生活の中で、過去にそれぞれの地域で起きた災害を貴重な教訓として十分に生かしてきたとは必ずしも言えないのが現実であろう。

例えば二〇一一年三月十一日の東日本大震災後、この巨大地震で発生した津波が、平安時代に同じく三陸沖を襲った「貞観地震」（八六九年、マグニチュード八・三）の津波に匹敵するものであったことが大きくクローズアップされた。

過去の教訓を生かすにしても一〇〇〇年オーダーの視野で取り組まなければならないと、多くの犠牲を出した東日本大震災で大きな課題として突きつけられた格好だ。

とはいえ、それほど長い時系列で災害の恐ろしさを振り返り、また伝承していくにはどうすればよいのだろうか。この問いに一つの答えを与えてくれているのが文学作品であろう。日本には地震、噴火、水害などの自然災害や火事などの災難について綴られた多くの文学作品がある。遠くは古代、中世の時代に遡り、地震の揺れ方や被害の状況、天変地異におののく住民の様子などが克明に記され、災害史の観点からも貴重な研究資料と言える。

## 永井荷風が「震災」に込めた心情

二〇一五年十一月に出版されたジャーナリス

ト・小山鉄郎氏の著書『大変を生きる 日本の災害と文学』（作品社）は、文学作品から日本人と災害について読み解くことを試みた秀作であり、富士山の宝永大噴火、安政地震、関東大震災、三陸地震津波などの災害と、それを作品に残した文学者たちが取り上げられている。

この中の「投込寺の永井荷風『震災』碑」と題した一項では、永井荷風の詩集『偏奇館吟草』から「震災」と題が付けられた詩にスポットを当てている。関東大震災で東京が焼かれてしまっただけでなく、それまでの価値までも消えてしまい、自分にはその世が理解できないという心情を表している詩だ。この詩碑が東京・南千住の浄閑寺にある。ここは「安政の大地震」（一八五五年）で死んだ多くの遊女が投げ込まれた寺として知られ、遊女たちを供養する「新吉原総霊塔」の近くに荷風の詩碑が立つ。この詩碑

の設計を建築家・谷口吉郎氏が手掛けたことも小山氏の著書で紹介されている。

「文学作品で自然災害が描かれた場面を読んでいくと、その文章の見事な描写力によって、災害のことが深く心に残る。もし読者が災害に遭遇した時に、印象深い文章の記憶が、その人の生死を分けるかもしれない」。文学作品から災害の姿に迫ることの意味について、小山氏はそう持論を書いている。

## 鴨長明「方丈記」の五大災厄

災害を扱った日本の文学作品の中でも、「初めての災害文学」と評されるのが鴨長明の『方丈記』である。

▲ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。▽

この流れるようにきれいな文体の書き出しで知られる方丈記には、大地震、大火、辻風（竜巻）、飢饉、政変など、京の都に起きたいくつもの大災難が綴られている。中世日本文学の研究で、NHKカルチャーラジオ『鴨長明と方丈記』波乱の生涯を追う」の講師も務めた浅見和彦成蹊大学名誉教授は、そうした惨事の「実情と実態をつぶさに調べ上げ、その深刻な被害を書きとどめた」作品であると解説する（浅見和彦校訂・訳『方丈記』筑摩書房より）。

方丈記に書かれた五大災厄は「安元の大火」（一一七七年）、「治承の辻風」（一一八〇年）、「福原への遷都」（一一八〇年）、「養和の飢饉」（一一八二―一八三年）、「元暦の大地震」（一一八五年）。

た歌人、随筆家として知られる長明は、類い希なるマルチな才能を持っていたとされる。浅見氏によると、例えば安元の大火で焼失した面積や治承の辻風が残した痕跡を実際に歩いて調査した可能性があるほか、新しい都である福原京の建設で何かしらの任務に就いていたとも考えられるなど、長明は「土木、建築、設計といったことにたけている人間であった」と考察できるといふ。

▲……おびたたく大地震振ること侍りき。そのさま、世の常ならず。山はくづれて、河をうづみ、海はかたぶきて、陸地をひたせり。土裂けて、水湧きいで、いはほ割れて、谷にまろび

方丈記を著した「方丈庵」の建築構造も自ら考案したもので、いつでも解体して移動できる、今でいうプレハブの住宅に他ならない。

いる。（略）▽  
一一八五年七月九日の正午頃に発生した「元暦の大地震」。長明の描写から、いつもとは異なる巨大地震が起こり、山は崩れて河を埋め、地面からは水が湧き出ている被害の状況が目につかぶ。

浅見氏は著書で、方丈記にあるこの部分を「当座は、人々すべてこの世のむなしさを述べて、少しは心の濁りも薄まるかとも見えたけれど、月日が重なり、年が経った後では、口に出しているという人さえいなくなってしまう」と訳している。

さらに、方丈記には本震後に三カ月ほど続いた余震活動がどのようなものであったのかがよく分かる描写もある。

大災難が続いた方丈記の時代ですら、災害が起きてしばらくすると、そのことが人々の意識から薄れていったのだろうか。方丈記という文学

## 時間の経過で薄れる意識

平安時代から鎌倉時代へと激動の時期に生き

学作品が伝える一つの大きな教訓であろう。